

肝胆膵外科（選択）

研修科	肝胆膵外科（選択）
責任者	教授 竹山 宜典
指導医数	3 名
研修期間	8 週間 ～ 12 週間
受入可能人数	1 名
一般目標 (GIO)	<p>1. 一般医として将来肝胆膵疾患の症例に対処するために、肝胆膵外科の基本的な考え方を理解し、基本手技や肝胆膵診療の知識、態度を習得する。</p> <p>2. 肝胆膵外科疾患の周術期における創部管理、全身管理、感染予防と栄養管理を身につける。</p>
行動目標	<p>1. 肝臓、胆道、膵臓の頻度の高い疾患を理解し身体所見を取ることができる。 各疾患の特徴的身体所見とともに、それらに合併する慢性肝炎、肝硬変、急性胆嚢炎、急性膵炎、閉塞性黄疸の所見を取ることができる。</p> <p>2. 血液検査、画像検査、内視鏡検査などから術前診断を行うことができる。 血液検査（肝炎ウイルス、肝機能、膵機能、腫瘍マーカーなど）所見を理解し述べることができる。 腹部エコー、CT（MDCT）、MRI（MRCP、造影MRI）PET-CTなどの画像所見を理解し述べる ことができる。 ERCP、EUS、PTCD所見を理解し述べる ことができる。</p> <p>3. 手術リスクを判定し、手術適応を判断ができる。 肝臓に対する肝機能から見た手術術式を選択できる。 閉塞性黄疸に対する手術リスクを判定し減黄処置の判断ができる。 炎症性疾患の手術時期を含めた手術リスクを判定する。</p> <p>4. 基本的な手術手技、内視鏡手術の外科技術を実施できる。</p> <p>5. 周術期の管理を適切に行うことができる。 受け持ち医として術前指示、手術申し込み、術後処置を行うことができる。 手術後の身体所見、術後検査、ドレーン管理をもとに術後経過を、患者と家族にわかりやすく説明し、電子カルテに入力できる。 術後合併症を把握、指導医とともに適切に対応できる。 退院を指導医とともに決定し、その後の療養指導を行うことができる。</p>

<p>方略 (LS)</p>	<p>受け持ち患者の症例を把握することで各疾患を理解し、血液検査、画像検査、内視鏡検査などから術前診断を行う。 受け持ち患者手術の適応、術式を選択し、手術リスクを判定する。その結果を術前症例検討会で発表する。 受け持ち医としての術前説明を指導医に同席し学ぶ。 外科症例カンファレンス、肝胆膵カンファレンスの討議に参加する。 腹部エコー手技を指導医のもと自ら経験する。 受け持ち医として肝胆膵手術の助手として参加する。 指導医のもとに開腹、閉腹操作を実践し学ぶ。 練度に応じて指導医のもとに胃空腸吻合、空腸空腸吻合を施行する。 内視鏡手術の基本的操作を外科シミュレーションラボで研修し、腹腔鏡下胆嚢摘出術を指導医のもとに術者として経験する。 受け持ち医として術前指示、手術申し込み、術後処置を行う。 手術後の身体所見、術後検査、ドレーン管理のもとに術後経過を、患者と家族にわかりやすく説明し、電子カルテに入力する。 術後合併症を把握、指導医とともに適切に対応する。 退院を指導医とともに決定し、その後の療養指導を行う。</p>
<p>評価 (EV)</p>	<p>研修医が到達目標を達成しているかどうかは、各分野・診療科のローテーション終了時に、医師及び医師以外の医療職が別添の研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを用いて評価し、評価票は研修管理委員会で保管する。医師以外の医療職には、看護師を含むことが望ましい。 上記評価の結果を踏まえて、少なくとも年2回、プログラム責任者・研修管理委員会委員が、研修医に対して形成的評価（フィードバック）を行う。 2年間の研修終了時に、研修管理委員会において、研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを勘案して作成される「臨床研修の目標の達成度判定票」を用いて、到達目標の達成状況について評価する。 研修医評価票 Ⅰ. 「A. 医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）」に関する評価 A-1. 社会的使命と公衆衛生への寄与 A-2. 利他的な態度 A-3. 人間性の尊重 A-4. 自らを高める姿勢 Ⅱ. 「B. 資質・能力」に関する評価 B-1. 医学・医療における倫理性 B-2. 医学知識と問題対応能力 B-3. 診療技能と患者ケア B-4. コミュニケーション能力 B-5. チーム医療の実践 B-6. 医療の質と安全の管理 B-7. 社会における医療の実践 B-8. 科学的探究 B-9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢 Ⅲ. 「C. 基本的診療業務」に関する評価 C-1. 一般外来診療 C-2. 病棟診療 C-3. 初期救急対応 C-4. 地域医療</p>
<p>責任者からの一言</p>	<p>肝胆膵外科学は専門性が高い特殊な領域と考えられがちであるが、実はその考え方や手技は外科学の基本概念に基づいている。肝胆膵という消化吸収代謝という従属栄養生物であるヒトの生命活動の本質をなす臓器群の意義と重要性をその病態下で体感し、それらの外科治療の周術期管理を学ぶことは、外科学に限らず幅広い領域における全身管理の習熟に役立つと考えられる。私どもは、この領域の疾患を偏りなく手掛けており、将来どの科に進んでも役立つ研修内容が提供できると自負している。</p>